

# 小論文

教育学部 学校教育教員養成課程（初等教育コース・特別支援教育コース）

## 注意事項

1. 「解答始め」の合図があるまでこの冊子は開かないこと。
2. この冊子は表紙を除き4ページである。
3. 「解答始め」の合図があったら、まず、掲示又は板書してある問題冊子ページ数・解答用紙枚数・下書き用紙枚数が、自分に配付された数と合っているか確認し、もし数が合わない場合は手を高く挙げ申し出ること。次に、受験番号・氏名を必ず解答用紙の指定された箇所に記入してから、解答を始めること。
4. 解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に横書きで記入すること。
5. 解答用紙は切り離さないこと。

下の文章を読んで、次の各問いに答えなさい。

問 1

本文の内容を踏まえて、「キー・コンピテンシー」とは何か説明しなさい。

(100字以内)

問 2

本文を読んで、学校教育に求められることについて、あなたの考えを述べなさい。ただし、著者の主張する「組織のトータル・コンピテンシー」に対するあなたの意見を含むこと。(600字以上 1000字以内)

**経済的価値の高い人間とは**

現在、アメリカ合衆国などの資本主義国では、教育は、経済的価値の高い「成功した個人」を育てるためのきわめて個人的、私的なものとなっています。日本も例外ではありません。

同じ時間働いても、労働単価の低い人間と高い人間がいます。つまり、社会の役に立つかどうかにかかわらず儲かる仕事ができる人と、儲からないかもしれないけれど皆の生活に必要な仕事をしている人がいるのです。そしてさらに、働かなくてもお金が入ってくるいわゆる不労所得がある人もいます。そのため、子どもたちは、手や体を使った生活に必要な技術や人生を豊かにする芸術を教わるよりも、よい収入を得るためにいかにうまく頭を使えるようになるかを教わります。

OECD（経済協力開発機構）が不確実性の増す今後の国際社会において現代人に必要な能力としてキー・コンピテンシーを提示したのは2003年です。ここでは、①言語や知識、技術を相互作用的に活用する能力、②多様な集団における人間関係形成能力、③自律的に行動する能力の3つが提案されました。このアイデアは、世界各国において「キースキル」「資質・能力」といった言葉でそれぞれ検討され、OECD加盟国を中心として3年ごとに実施される15歳を対象とした国際的な学習到達度テスト（PISAテスト）の結果分析と共に、グローバル化の中で競争的關係にある国家のそ

れぞれの教育政策に反映されてきました。

そもそもコンピテンシーという概念（McClelland.D.C., Testing for Competence Rather Than for “Intelligence”, American Psychologist, 1973）は、外交官が高いパフォーマンスをあげる能力を要素に分解し、専門職育成に活用するために開発されました。この概念は、専門職に必要な能力の目安を考えるために、あるいは、自分で必要な要素と欠けている要素を確認し、継続的に専門性を追求し続けるためには有用な概念ですが、個人の能力の評価指標として第三者が査定に用いるのに適切な物差しではないと私は考えています。後にも述べますが、能力は常に状況の中で変化し、関係性の中で発揮されるものだからです。しかし、それが、主に経済的観点からの人材の育成指標の作成に用いられ、さらに国家が学校教育を通じて一般の子どもをより高い価値のある人間に育てるための指標を作る際に用いるようになったのです。

キー・コンピテンシーは、「個人の成功」と「社会の発展」の双方にとって価値があり、さまざまな状況における複雑な課題に応えることのできる、すべての人にとって重要な汎用的能力とされています。現代社会の能力指標として一般的に役立つと考えられているのです。確かにこれらのコンピテンシーを持った人材は、今の社会を支えていくでしょう。

### 組織のトータル・コンピテンシーへ

しかし、私たち人間の価値を、「すべての人にとって重要な汎用的能力」の指標で評価することは可能でしょうか。誰のため、また、どのような時に役立つのかをしっかりと考え、同時に別の複数の評価軸を持つことの必要性を認識していないと、この指標で高く評価される人材を輩出することが学校教育の目標と思いついでしまわないでしょうか。

コンピューターや言語や知識、技術を駆使して自分を取り巻く環境や他者と対話しながら世界に働きかけることができれば、異なる背景を持つ人々とよい関係を作って協働して問題解決できれば、広い視野を持って自律的に行動できれば、それは素晴らしいことですが、そもそもキー・コンピテンシーはすべての人が身につけることをめざすべき能力と言い切れるのでしょうか。

（中略）

農業従事者について考えてみましょう。これからの社会において、野菜の多くが工場や AI で生産管理されるような時代が来れば、野菜を育てているだけの農業従事者は職を失うかもしれません。6次産業化（第1次産業である農業と、第2次産業である加工業と、第3次産業である情報産業を掛け算のように組み合わせ、現代社会においてより消費を生み出す経営の多角化）に取り組むことができるような能力が農業従事者にも求められ、有能なビジネスマンに利益を収奪されないように、希少な農業製品を海外に輸出できるように、賢くならなければ生き残っていけないのかもしれません。

農業従事者の脳の中にある季節や水や空気や虫や太陽に関する知識や情報は、インターネットで検索すれば出てくる時代です。生産者の顔が見える野菜などという宣伝文句も、メディアとつながればこそその情報で、情報弱者の零細農家は、コロナ禍でせっかく実った野菜を廃棄するしかありません。だから、将来の農業従事者にも基礎学力、語学力や ICT の能力をつけ、さらに対人関係能力、マネジメントやリーダーシップの力をつけていかなければならないということになるのでしょう。

人間には無限の可能性があるので、将来、何かその可能性が開かれるときに動けるようにより多く準備しておくといいというわけです。

でも、そのために、この複雑化していく社会では、大人になるまでに学ばなければならないコンテンツや技能は限りなく増え続けています。無限の可能性を残すために、みんなが同じ教科書の内容を学んだことにする、というのが今の教育です。実際は学んでいない子どもたちがたくさんいるのに。

2020年8月末のことです。北海道の小さな農家が育ててきたアロニア（ブルーベリーより一回り大きい果実）がコロナ禍で業者から納入停止の連絡を受け、出荷できなくなるという事態が起きました。その関係者がインターネットで助けを求めたところ、あっという間に支援の輪が広がり、収穫のボランティアが集まり、アロニアは完売となりました。アロニア農家と、その農家と一緒に歩んできた人々と、さらにその人々と信頼関係でつながる全国の人々が、急ごしらえのネットワークでつながり、農家は倒産を免れました。

農家の人たちは自分たちで発信する力は持っていませんでした。でも、それを全国に発信する力を持った人たちとしっかりとつながっていました。彼らと発信者との間

に日頃から築かれていた温かい信頼の関係性が彼らを救い、関わった人たちに感銘を与えました。

ここに関わった農業従事者たちの力は、キー・コンピテンシーで測れるものでしょうか。それを支えた人たちの力はどうでしょうか。各個人がそれぞれキー・コンピテンシーを身につけている必要性はどのくらいあったといえるでしょうか。

関係する人たちの総体的な力、それを私は「組織のトータル・コンピテンシー」と呼びたいのですが、それこそが必要なものではないでしょうか。先述のように、コンピテンシーという概念は、一人で重大な決断を迫られる外交官の力を分析するところから作られた概念です。でも、私たちは普段、人と共に生きています。その中で用いられる多くの能力は、実は個人単位で測れるものではありません。キー・コンピテンシーを身につけた人と幼馴染<sup>おきななじ</sup>みだったりなんとなく仲がよかったりして力を借りることができれば、それでいいのかもしれませんが。コンピテンシーは、たえず関係性の中で生かされていくものだと思うのです。

[出典] 武田信子『やりすぎ教育 商品化する子どもたち』（ポプラ新書、2021年）。出題にあたり原文の一部を改変し、原文（縦書き）を横書きに、読点「、」をコンマ「,」に改め、引用した。漢字表記は、送り仮名を含めすべて原文のままとし、常用漢字表にない文字には出題者がふりがなを付した。